

九州の神楽  
**神、楽(あそ)ぶ庭**  
 ～天の岩屋神話～  
 Kyushu Kagura Symposium

三浦佑之氏 (千葉大学名誉教授)



神楽という極めて楽しい芸能としての、あるいは神祭りとしての神楽は、昨日もシンポジウムがあったし、他の方のお役目ということでお任せし、私はその一つのものになっている神話の『古事記』、あるいは『日本書紀』の中で、神楽の題材になっている神話をどのように読めばいいか、ということをお話したいと思う。題だけは少し神楽らしく、「神、楽(あそ)ぶ庭」というふうにつけさせていただいた。その中で、恐らくどこの神楽も、先ほど演じられた早池峰の岳の神楽もそうだが、ほとんどの神楽が「岩戸神楽」と呼ばれる「天の岩屋」の神話、タヂカラヲが岩屋の戸を開けて、アマテラスを引っ張り出すという神話を演目に取り入れている。これは一番の人気の演目であり、クライマックスで演じられる神楽として登場する。普通、九州の神楽だと三十三番の神楽が舞われることになっているが、たとえば昨日演じられた船引神楽は確か二十六番、ただし船引神楽は昼神楽だが、一方の豊前神楽は「タヂカラヲ」という題材があったし、それからこのあとに演じてくださる尾八重神楽では「タヂカラ」や「戸開き」など、それが三十三番のうちの二十九、三十番、といったほとんど終わりの頃、夜が開けて、あるいは夜明けになる時間に演じられる神楽として、「天

の岩屋」の神話がある。その神話をどう読むか、という部分は、神話研究の中でもいろいろなことが論じられているし、神楽研究の方もいろいろ論じていらっしやると思うが、私なりにこの神話の解釈をすることでどうなるか、少しお話ししたいと思う。

『古事記』上巻と『日本書紀』巻一・二 構成対照表

作成=三浦佑之

古事記 [漢字+仮名遣+数字(括弧内省略)]	総字数=13948字	日本書紀 [漢字+仮名遣+数字(括弧内省略)]	備考
A イサナキとイサナミ	21% ■ 2919字	巻一 1~8段	天の岩屋神話
1. 天磐岩・オノゴロ	233字	〇 〇	一四段
2. キ・ミの良生み/神生み	1172字	〇 〇	一四段
3. イサナミの死とイサナキの黄泉取返	963字	× 〇 (五-6)	五段
4. イサナキの黄泉と三貴子の誕生	551字	△ 〇 (五-6)	正伝(略)
B アマテラスとスサノヲ	14% ■ 1909字	巻一 9~11段	天の岩屋神話
1. イサナキの命とスサノヲの追放	283字	〇 〇 (五-6)	極点への追放
2. スサノヲの崩天とアマテラスの脱逃	282字	〇 〇	六段
3. ツケによる生み	602字	〇 〇	六段
4. スサノヲの鬼身	185字	〇 〇 (七-2)	七段
5. 天の岩屋の再構築	557字	△ 〇	正伝、略
C スサノヲとオホナムヅ	16% ■ 2294字	巻二 9~11段	ツクヨミの脱逃
1. 五穀の起源	152字	× △ (五-11)	八段
2. スサノヲの牙手退治	474字	〇 〇	八段
3. スサノヲとクシナギハヒメの結婚	142字	〇 △	一事に取替
4. スサノヲの神婚	208字	× △ (八-6)	
5. オホナムヅと姫のシロウサギ	416字	× ×	
6. オホナムヅと八十神	248字	× ×	
7. オホナムヅの神の御託話同	561字	× ×	
8. 妻帯の中二区別	93字	× ×	
D ヤチホコと女たち	14% ■ 1989字	巻二 9~11段	天の岩屋神話
1. ヤチホコのメナカヒメ求婚	489字	× ×	
2. セセビメの嫁と大田戸	564字	× ×	
3. オホナムヅの神婚	317字	× ×	
4. オホナムヅとメナカヒメ	231字	× 〇 (八-6)	
5. 母の命を奪った神話	497字	× 〇 (八-6)	
6. オホナムヅ (天孫) の神婚	291字	× ×	
E 平定されるオホナムヅ	13% ■ 1809字	巻二 9~11段	天の岩屋神話
1. アマテラスの地上取返	102字	△ ×	不明(九段)
2. アメノホヒの失敗	122字	〇 ×	
3. アメノホヒの失敗	459字	〇 〇	
4. アホナムヅとメナカヒメの怒り	351字	〇 〇 (九-1)	
5. カミヤマトの神婚	263字	× △	
6. ヤチホコとメナカヒメ	577字	△ ×	
7. タケミカタの神婚	209字	× ×	記載なし
8. オホナムヅの神婚	368字	△ ×	描写略
F 地上に降りた天つ神	22% ■ 3028字	巻二 9~11段	天の岩屋神話
1. ニニギの誕生と降臨	753字	〇 〇	
2. カミヤマトとメナカヒメ	238字	× 〇 (九-1)	
3. コノハサカヤメとイサナキ	291字	× 〇 (九-2)	
4. コノハサカヤメとイサナキの火葬	157字	〇 △ (九-5)	書五は別名
5. ムミサチとメナカヒメ	1142字	〇 〇	十段
6. トヨタマビメの出生	355字	〇 〇 (十一-3)	詳細な一書4本
7. ウヤフキアヘの結婚	92字	〇 △	十段



さて、父のもとから逐らされたハヤスサノヲは、「しからは、アマテラスさまにわけを申しあげてからおいとましょ」と言...

ところが、アマテラスは、「しからは、そなたの心の清く明きは、いかにして知ることができましょ」と仰せられた。そこで、スサノヲは「おのわの、ウケヒをして子を生むことにいたしましたしよ」と告げた。

これは『古事記』および『日本書紀』の神話、たとえば『古事記』だと上中下三巻のうちの上巻が神話、中巻下巻は天皇たちの物語となっている。

「天の岩屋」の神話というのは、それよりずっと前の部分で、流れからすると『古事記』の最初に出てくる神話だ。Bの部分になる。イザナキ・イザナミがたくさんの島や神を生んで、イザナミが火の神を生んで死んでしまう。

故に足須佐之勇命言、然者、諸天照大神神降臨、乃參上天時、山川悉動、国土皆震、天照大神神聞而、詔我部勢之上来由者、必不善心、欲即解臣耳、

さてここにアマテラスとスサノヲとは、それぞれ、天の安の河を間に挟んでウケヒの餌をこぼした。その時に、アマテラスが、まず、タケハヤ...

「おのわの、ウケヒをして子を生むことにいたしましたしよ」と告げた。ところが、アマテラスは、「しからは、そなたの心の清く明きは、いかにして知ることができましょ」と仰せられた。

そのウケヒで、赤ちゃんを生む。普通、赤ちゃんは、男が生まれるか女が生まれるか、そのどちらかしかないの、それによって、心の清明、清らかか汚いか、ということを決めようとなる。ところが、これは大変問題のある神話だが、スサノヲはアマテラスの頭や腕に付けている玉をとって、それをバリバリと口で噛んで、口から吹き出して、5人の男の子を生む。アマテラスは先に、スサノヲの剣から3人の女の子を生んでいるのだが、アマテラスが生まれた子どもに対して「女の子はお前の剣から生まれたからお前の子どもである。男の子はスサノヲが吹き出したが、その玉は私の玉だから私の子どもだ。だから男の子は私が育てる」となった。確かに、それは大変な問題で、現代でも父親の子か、母親の子か、認知裁判があったりするわけだが、それと同じように、アマテラスは玉が私のものだから私の子だという。そうするとスサノヲは、女の子が自分の子だとなるのだが、それを受けて「ハヤスサノヲはアマテラスに言うた。『わが心は清く明し。それゆえに、わたしは手弱女を生み成すことができましたのです。これによりて申せば、わたしは、おのずからウケヒに勝ったのです』」と、そう言って、高天の原で大騒ぎをする。

どんな大騒ぎかという、アマテラスが一生懸命高天の原で作っていた田の畦を壊したり、アマテラスが神様に捧げるため神を祭り、神と一緒に食事を召し上がるための大嘗という最も大事な建物に糞をまき散らしたり。そんなことをする。

スサノヲには幼児性が残っていて、幼子のようなところがあるので困惑するのだが、アマテラスは何とかとりなす。ところが最後に、アマテラスは機織りの女たちに神に捧げる大事な衣を織らせていたところ、その建物の屋根に穴を開けて、生きたままの馬の皮をはいで、その皮を屋根から落とした。そうしたら機織りの女がその皮をかぶって、びっくりして機織り機から落ちて、持っていた梭で体を突き刺して死んでしまうということが起こる。それでアマテラスは、このままにしておく世界がどうなるかわからないというふうに思い、天の岩屋に籠ってしまうという形で物語は展開する。

そこでようやく「天の岩屋」の神話に入っていく。この「天の岩屋」の神話というのは、神楽の題材として最もよく知られたもので、『古事記』でも語られている。そこを集中的に分析しながら考えていきたいと思う。この「天の岩屋こもりと祭儀」として語られている神話は、

神話研究の中では大嘗祭、あるいは鎮魂祭と呼ばれる最も重要な冬の季節の切れ目の神話として、宮中などでずっと続いているものだ。今度、天皇の代替わりがあって、秋には大嘗祭が行われる。いわゆる大嘗祭とは天皇の即位儀礼だが、その即位儀礼が行われることになっていると思うが、元々は毎年の新嘗祭と呼ばれて、穀物の感謝祭、その前には鎮魂祭といわれるお祭りが行われる。魂を鎮めるので「鎮魂」と書くが、意味的には魂を元気づけるというお祭りだと考えていただいたほうがわかりやすいと思う。そのお祭りというのが、宮中の儀礼では、旧暦の11月中の卯の日に行われる。今だと、だいたい12月の下旬、冬至と重なる。その冬至は、冬から春への変り目、そういう変わり目に北半球ではいろいろなお祭りが行われる。それぞれの民俗の中で最も重要な生命の回復の儀礼が行われるのだが、その儀礼と結びつけながら、神話が説明される。このパターンが大変多い。恐らく、冬から春への変り目、生命の回復の時期を背景にしながら、この神話は語られているのだと思う。そして九州の神楽、宮崎県の椎葉にしろ、米良にしろ、だいたい夜行われる神楽は、12月を中心に行われている。これこそ、まさに新しい生命を迎えようとする儀式に関わっていると考えることができる。もちろん、現代の神楽に『古事記』や『日本書紀』の神話が組み込まれるのは、ずいぶん新しい時代のことだと考えていいと思うが、神楽自体はそういった古い儀礼的な性格を持っている。この神話を背景として、冬至の頃の冬の儀礼が神話にはどう語られているか、ということを見ていきたい。

「さあ、アマテラスが籠ってしまうので、高天の原は隅々まで真っ暗闇になってしまうて、葦原の中つ国もことごとく闇に覆われてしまうた。このために、上の国も下の国も、常夜が続いた。」

「下の国」というのは地上世界だ。

「ここに、すべての悪しき神がみの音は、五月蠅のごとくに隅々まで満ち溢れあらゆる恐ろしい物のわざわいがことごとくに起こり広がった。さても困った八百万の神がみは、天の安の河の河原に我も我もと集まり集うてきて、タカムスヒの子のオモヒカネに、どうすればよいかを思わしめることにした。」

高天の原の神様は会議が大好きだ。その国会議事堂み



たいなところが「安の河」という河の河原にあり、その河原でいつも会議をしていた。そこでは神々が集まって「どうしようか」と相談して、タカミムスビという神様の息子オモヒカネという神を頼る。この神様は、原文には「思金神」とある。「金」は「きん」という意味ではなく、意味的には「兼ね備えている」ということだ。「思いを兼ね備えている神様」、思いとは知恵、思慮。「考えること」と考えて欲しい。そういう思いを兼ね備えている神様とはつまり、とても知的な神様ということだ。抽象的な神というのは日本の神様には少ないのだが、このオモヒカネというのは、あらゆることを考える神様だ。この神様にアマテラスを岩屋から出すためのいい知恵を考えさせた。オモヒカネの役割は、演劇でいえば脚本家、そして演出家。オモヒカネは台本を書き、神々みんな役を与え、高天の原で一芝居打つ。それで岩屋の中のアマテラスを騙して、引っぱり出そうとオモヒカネは考えた。その芝居の段取りが、この神話の中でずっと語られていく。そこでオモヒカネは、「常世の長鳴き鳥」、先ほどの岳神楽で出てきたニワトリを使って「常世の長鳴き鳥を集めて鳴かせた」。ニワトリは夜明けに鳴く。まず「朝がきたよ」と鳴かせる。朝が来たということにニワトリが鳴くことによって語る。これは世界中の昔話や神話のパターンだ。そうやって鳴かせた。

「そうしておいて、天の安の河の河上にある天の堅石を取ってきて、天の金山の真金も取ってきて、鍛人のアマツマラを探してきて、イシコリドメに言いつけて」

というふうにお祭りの準備をする。その準備を順番に描いていく。まず「天の堅石」を高天の原の山から取ってきて、堅い岩石を取ってきて、そしてそれを鉄床にして鍛冶屋さんに命じて鏡を作らせる。これは三種の神器、天皇家の神器の一つの鏡だが、その鏡を作らせた。そしてどうしたか。「鍛人のアマツマラ」はお分かりだと思うが、「マラ」だ。その「アマツマラ」を探してきて、「イシコリドメ」に鏡を作らせる。「イシコリドメ」は女神だが、石のごとくに凝り固める女神という意味だ。マラを石のごとくに固める女神。その二人が溶けた鉄、あるいは青銅をカチンカチンに固めて鏡を作る。恐らくここでは、滑稽な俳優(わざおぎ)が行われている。イメージとして、イシコリドメとアマツマラの滑稽な俳優だと考えていただければ、よく分かると思う。そのようにし

て鏡を作った。次にはタマノオヤに言いつけて、これは玉造の元祖だが勾玉、これも天皇家の三種の神器の一つ、「八尺瓊の勾玉」と呼ばれる勾玉を作らせた。そうして祭りには占いが必要なので、香山に棲んでいる大きな鹿を生きたまま持ってきて、肩の骨を抜いて、その肩の骨で占いをする。「フトマニ」という占いだが、この祭りがうまくいくかどうかを占わせて、榊の木を根がついたまま引っこ抜いてきて、そこに、上の方には作った勾玉を、真ん中の枝には鏡を、下の方には白和幣、青和幣を、この和幣というのは幣のことで、神様への捧げものだが、コウゾで作った幣と、麻で作った幣をかけて、まるでクリスマスツリーのように榊をきれいに飾って、それをフトダマが持って、アメノコヤネという中臣氏の祖先神、中臣という神を祭る祖先神が太詔戸詞(ふとのりとごと)という祝詞を唱えて、アメノタヂカラヲが岩屋の影に隠れた。神楽では一番おもしろい部分だが、タヂカラヲが岩屋の戸の脇に隠れている。これはすべてオモヒカネの演出で、神は演出通りに動いている役者だと考えていただければいい。そうしておいて、いよいよ真打ちのアメノウズメがやってくる。

「アメノウズメが、天の香山の天のヒカゲを襷にして肩に掛けて、天のマサキをかずらにして頭に巻いて、天の香山の小竹の葉を束ねて手草として手に持って、天の岩屋の戸の前に桶を伏せて置いて、その上に立って、足踏みして音を響かせながら神懸りして、二つの乳房を掻き出して、解いた裳の緒を、秀処のあたりまで押し垂らした。」

ウズメがいわゆる「神懸り」したとあるが、これはあくまでも神懸りしたフリをしている。わざわざ二つの乳房を出して、スカート(裳)まで外して、紐をずっと下まで垂らしていく。これもかなり滑稽で猥雑なあるいは卑猥な大変うれしいことをする。そうやって芝居が進んでいくと、「ほのかな庭火」、真っ暗だから火をたいてあって、

「庭火に浮かぶウズメの踊りを見ておった八百万の神がみは喜んで、闇におおわれた高天の原もどよめくばかりの大声に包まれて、神がみは皆、喜びの声をあげた。」

神々は、ウズメの踊りに拍手喝采という形になる。これも仕込んであるので、観客もまた演技をしているのか

もしれないが、ウズメの踊りを見れば男どもは喜ぶだろうとオモヒカネは分かっているから、彼らは知らないで喜んでいるのかもしれない。そんな喜びの声を上げた。そしてちょっと先まで言うと、アマテラスは怪しいと思った。外から楽しそうな声が聞こえてくる。アマテラスはどうも、ものすごく自尊心の強い女という感じがするのだが、「私がないのに、なぜ他の神々は楽しそうにしているのだ」と思う。許せない。そうなるのをオモヒカネは分かっていた。だからこういう演出をした。それで

「『われが籠もりますによりて、天の原はおのずからに暗く、また葦原の中つ国もみな暗いだろうと思うていたのに、いかなるわけか、アメノウズメは喜びをなし、また八百万の神がみは、みな喜びの声をあげているのか』」

そういうふうに見かねた。それを待っている、アマテラスはきっとそう言うだろうと思っている。だから、ちゃんとウズメに言わせる言葉を教えてある。ウズメはどう答えたか。

「『あなた様にも益して貴き神のいますゆえに、歡喜びえらき楽しんでるのです』」

あなたよりもっとステキな神様が私たちにはいらっしやるので、嬉しいんですよ、と答えさせた。そして、細めに天の岩屋を開けて外を覗いているアマテラスのほうに、作った鏡をずっと差し出した。そうしたら、

「鏡をずっと差し出して、アマテラスにお見せすると、いよいよあやしいことだと思いいなくなって、いま少し戸のうちから歩み出て、鏡の前に近づいてきなさったが、その時に、戸のわきに隠れておったアメノタヂカラヲが、そのアマテラスの御手をさっと握って外に引き出したかと思う間もなく、フトダマが、アマテラスの後ろに尻くめ縄を張り渡して、『ここから内にはお帰りになれませんぞ』と申し上げた。」

それでアマテラスは帰れなくなった。尻くめ縄とは、注連縄のこと。注連縄を張って、結界を張ってしまった。だから彼女は出てこざるを得なくなったと語っている。ここでみなさんお気づきだろうか。アマテラスに鏡を見

せた。そしてアマテラスが一步踏み出して、不思議だと思った。「いよいよあやしいことだと思いいなくなって」とあるのだが、下の原文では「天照大神いよいよあやしいと思いて」というふうに書かれていて、ますます変だと思った。鏡に映った姿を見て、「えっ」と思ったという点を見ると、アマテラスは鏡を見たことがなかったのかな、と思わないだろうか？ そして、アマテラスは現在、伊勢神宮に祭られているが、アマテラスのご神体はどうなっているかという、鏡そのものとしてある。アマテラスは鏡だ。なのに、そのアマテラスともあろうお方が鏡を知らない。というバカバカしい笑い話。それがこの神話だ。そういうふうにして、知らぬはアマテラスばかりなり、何にも知らないアマテラスをみんなが一緒になって騙して、岩屋から引っぱり出して、世界はまた新しい世界がやってきた。再生した。そう語られているのが天の岩屋の神話だ。

ちょっと変なことばかり言っているとと思いいなくなるかもしれないが、それがこの神話の読みだ。この神話というのは、真面目なものではなく、ちょっと卑猥なドタバタ喜劇。それが神々によって演じられている。そうお考えいただくのがこの神話の読みである。それが私の解釈だ。そして、まさに神楽は、そういう世界だ。つまり神楽というのは、神とともに、人が神と一体になって充足する。喜ぶ。そういう場をつくるのが神楽だ。そしてこの冬至の季節の鎮魂から新生へ、という冬至の季節の北半球の祭りというのは、どこでもどんちゃん騒ぎをするというのが普通だ。太陽を驚かせて、新しい太陽を元気づけるという祭りなので、こういう神話が必要なのだ。そういう背景を持ちながら神話は語られ、神楽は舞われるとお考えいただくと、なぜ夜を徹して神楽を演じていくのか、というような世界へ、少しはわれわれも近づけるのではないかと思う。

それともう一つ、付け加えると、「神々は皆、喜びの声をあげた」それから「ウズメは喜びをなし」「みな喜びの声をあげているのか」、でもあなたよりもステキな神がいるから私たちは「歡喜びえらき楽しんでるのです」。「あそぶ」とかいう言葉が何度も出てくる。この言葉をどう解釈するか、ということをお話したいと思う。

「喜びの声をあげた」というのは、原文では「共咲」とある。「咲」という漢字は、古事記では「笑」と同じ意味で使っている。「笑」という文字は古事記では一切



使われていない。一般には「咲く」と読む字だが、古事記ではすべて「咲」を「笑」の意味で使っている。では、その「咲」を日本語でどう読むか。

二番目は「為楽=あそびをし」という部分だが、「楽」は「あそび」と読む。「あそぶ」というのは、レジャーという意味ではなく、神と人が一つになって楽しむという意味で「あそぶ」という言葉を使う。それから「もろもろゑらく」というのは、みな喜びの声をあげている。原文は「諸咲、私は「もろもろゑらく」と読んだ。その最後は「歡喜咲楽」とある。この「咲」だが、一般的に『古事記』のどの注釈書を読んでも「ともにわらう」とか「もろもろわらう」とか「もろもろわらいき」と過去形にして読んだりするが、「わらう」と読むのは、私は間違いだと思っている。

それはどういうことかという、日本人の「わらう」という言葉について、柳田國男という民俗学者はこのように言っている。柳田國男は宮崎県では馴染みの深い学者。柳田は戦後すぐに『笑の本願』

『不幸なる芸術』という笑いに関わる本を2冊出している。その中で柳田は、「わらう」と「ゑむ」という二つの日本語について比べている。「わらう」は元々、「わる(割る)」。つまり二人の関係を分断、壊してしまうという意味で、「割る」という意味で「わらう」は使われると述べている。だから「わらう」とは、あまりいい意味では使わない。それに対して、「ゑむ」というのは人と自分とが一体になる。「ほほえむ」という言葉は、まさにそう。そういう二つの言葉

が日本語にはあったと柳田はいう。一方は声があり、一方は声がない。というふうな説明を柳田はしている。ただ、日本語を見ていくと「わらう」と「ゑむ」という言葉だけで説明すると、日本語の「わらう」の世界がとても分かりにくくなる。それはどういうことかという、人を軽蔑して「わらう」場合と、お酒を飲んだり、みんなで楽しく談笑したりしながら声をあげて仲よくなって「わらう」行為があるので、声を出す「わらう」にも2種類ある。それを同じ「わらう」という言葉で表すわけにはいかないし、柳田國男はみんなで喜んで声をあげて

「わらう」という意味の「わらう」を説明していない。それはなぜかという、中世以降にはそれに該当する言葉がないからだ。

それに対して、古代にはその言葉がある。それがここに書いた「ゑらく」という行為だ。「ゑらく」というのは、心から喜んで、みんなで充足して楽しむ。それが「ゑらく」だ。だからここでは、「神がみは皆、喜びの声をあげた」と訳したが、ここは「八百万神、共咲(やおよろずのかみ、ともにゑらく)」、あるいは「ゑらきき」というふうに読むべきだと思う。「為楽(あそびをなし)」はいいとして、「みな喜びの声をあげているのか」ということも「諸咲(もろもろゑらく)」と読まないといけな。それから最後の「歡喜咲楽」は「よろこびゑらきあそぶ」というふうに読まないという意味が通じない。そのように読むことによって、初めてこの物語の世界、神楽の持っている充足感、祭りの持っている豊かなやわらぎ、そういうものが理解できるのではないか。そのように私はこの場面を解釈している。

最後に、「鏡を知らないアマテラス」について付け加えると、落語の「松山鏡」などもそうだし、昔話にもたくさんあるが、この系統の話、鏡を知らない人間を笑うというのは、日本だけではなく世界中に古くからある。恐らく、人類が鏡を知って以来、この笑い話は存在するのではないかとされるくらいに、世界中に広がっている昔話だ。そういうお話の世界の笑いを取り込みながら、この神話が語られている。そして、笑いに満ち溢れた神楽の世界と重なっていく。この演目が神楽に入り込んでいくのは、神楽の歴史からいけば恐らく、ずっと新しいことだと思うが、その根底につながっている神楽という場の持っている宗教的、信仰的世界と、人々の笑いや複雑な世界とは、この神話とすぐリンクする。重なりながら、だからこそ最も重要な演目として生き続けていくのだろうな、といつも感じながら神楽を拝見している。

(註) 神々のあそびと「咲」  
「咲」笑 (一般的に、「わらう」と訓む。しかし、「ほほえむ」)  
共咲 || ともにゑらく  
諸咲 || もろもろゑらく  
為楽 || あそびをし  
歡喜咲楽 || よろこびゑらきあそぶ